

産経新聞 東京朝刊 2020/05/06(水)

新型コロナウイルスの拡散に人々は怯えを隠せない。医療崩壊のニュースが報じられるたびに不安と恐怖の縮む思いに駆られています。ウイルスの正体がいまたしかめず、治療薬の開発、免疫力効果の発揚にはなお時間を要するらしい。

この状況下でおそらく最も深刻なことは、人々の心の中に不安感や強迫観念が密やかに進んでいくことであろう。強迫観念が少しずつ積もり、やがてその累増が社会的なパニックを引き起す危险性がある。

不安の「虜囚」となるなかで生きこし生けるものにはすべてが生存本能がある。自己防衛本能がある。人間の本性である。(この本性があつてこそ、人間は古来このか細い人生を生き永らえてこられたのにおちがいはない。しかし、人間の生存本能は、時として特定の他者の生存を脅かすものを対象的に見出し、これを非難し糾弾する攻撃的な心理へと人々を誘うつづきと危うさがある。罹患者を排除しようとする差別的な心理はしば

理性は直感の心の性質が人間の中に内在していることを、私どもはありありと認めなければならまい。その認識に至つて初めて私どもは理性と反理性の在り処に覺醒することができるのである。

医療崩壊のことを聞かない日はない。日本の医療水準・制度は世界においても際立つ。この医療を崩壊させるものが、わが内なる反理性であることに私どもは気づく必要がある。

病むことは不安に思い、死を恐怖することはすべての人間に共通する心情である。不安・恐怖は誰にもあり得る自然の心理である。不安・恐怖を「異物化」して、これを本来あるべきものではないとして排除しようとする國らうな人は、私どもはますます深い不安・恐怖の「虜囚」とならざるを得ない。強迫神経症としてかねて精神医学において語られつづけてきた症状が

森田正馬は次のように記してゐる。「生きこし生けるものの絶する活動や、死に臨んでもがき反側する有様は、生物界における客觀的な眞象としてわれわれを察するところのものである。その客觀的現象について、私はこの生の欲望と名付け死の恐怖とする」

「情報公害」の拡散を避けよ

人類の歴史は感染症との闘争史であったといわれる。確かにそうであろう。しかし、ならば、これまで収束することのないパンデミックはなかったということになる。ファクト（事実）とエビデンス（根拠）を繋々と伝えてほら、地味で無名な報道に徹してほしい。そして何より、この残酷な戦場の最前線で身命を賭して戦う多くの医療従事者をはじめとする者たちに、心から深い敬意とする。その戦いが成果をあげるよう祈る、ジャーナリズムは国民心理をそういう方向に導いてほしい。（わたなべ としお）

新型コロナ感染不安の心理学



拓殖大学学事顧問

渡辺 利夫

る ようなものだと表現する。強迫観念の生じる条件は、ある特定の想念、例えばウイルスの拡散恐怖についてこれを感じまい、考

新聞もテレビも新型コロナウイルスの恐ろしさ、医療崩壊の深刻さを訴えて倦むことがない。それは真剣な報道であろうが「合

2020. 5. 6